

国際研究報告

リジェクトなんて怖くない

—国際ジャーナルに投稿し続けることの意味

高橋 征仁

(たかはし まさひと)

人文学部教授

たしか私が大学院生の頃、筒井康隆の小説『文学部唯野(ただの)教授』で、査読のない紀要論文で教授昇進していく「文学部」の内情が話題になった。それから30年以上経っているが、インナーサークルでの論文発表を基軸とした「文学部」の業績評価は、現在でも、本質的には変わっていないように感じられる。ただし、同じ「文学部」のなかでも、社会心理学や心理学の分野では、1990年代以降、査読付き国際ジャーナルを目指した研究活動が急激に活発化してきた。

その中心となっているImpact Factor (Clarivate Analytics社)やCiteScore (Elsevier社)、Google Scholar Metricsなどの被引用指標に関しては、論文や分野ごとの偏りが極めて大きいため、様々な批判が付きまわっている。しかし他方、それらの指標の存在によって、旧来の排他的な学閥や権威主義的な徒弟関係が破壊され、研究活動のグループ化、学際化、国際(英米)化、計量化が促進され、研究の革新性や効率性、展開スピードが格段に向上してきたというポジティブな面は見逃されがちである。

社会心理学の分野でいえば、おそらく日本人のトップは、アメリカ心理学会APAのDistinguished Scientific Contributions Awardを先日受賞した北山忍ミシガン大教授で、Google Scholarの被引用数は79,846件を数える。何かと物議を醸すことの多いJonathan HaidtやSteven Pinkerの被引用数がそれぞれ93,267件、

109,719件であることから考えても、彼が世界のトップランナーの一人であることは間違いのないだろう。

そしてその先に控えているのは、行動経済学という新分野を立ち上げた怪物Daniel Kahnemanであり、Google Scholarの被引用数は、なんと486,400にも上る。ドラゴンボールでいえば、フリーザの戦闘力(53万!)にも迫る勢いである。このように一線級の研究者の戦闘力スカウターとして用いる限り、被引用指標はかなり機能する。むしろ、こうした指標は、ヤムチャ(177)や亀仙人(139)にも遠く及ばない、私のような平凡な研究者の戦闘力(79)を測るには、誤差が大きすぎるという点に大きな問題がある。

もちろん、私個人は、インパクトファクターが全く評価されない人文学部に所属しており、国際ジャーナルをめぐる争いに参加しなければならない必然性はない。国際比較調査には膨大な手間暇がかかるうえ、リジェクトや大幅な修正要求を受けることも日常茶飯事である。昨年、Nature社のオープンアクセス誌Scientific Reports(前年IF=4.53)に投稿した際には、掲載までに約7ヶ月もかかったうえに、論文掲載料として2000米ドルを要求された(支払ってくれたイスラエルの研究者にセカンドオプサーを譲った)。今年、Elsevier社のPsychiatric Research(前年IF=5.25)に論文が掲載された後は、論文投稿や学会発表の依頼(本物も偽物も)が山のように届いてメールがパンクしてしまった。

しかし、それでもなお、研究者としての人生を選んだからには、自分の研究成果の意義を世界に向けて問い続けたいと考えている。本当に怖いのは、論文をリジェクトされることではなく、自分から論文を机の中にしまい込むことではないかと思う。私自身は定年まであと数年しかないが、それでもいつの日か、Kahnemanら巨人の肩の上に乗って、その先に広がる地平を眺めたいと願っている。

留学の現場から

イギリス留学体験記

宮崎 花梨

(みやざき かりん)

人文学部 4年

私は2021年の9月から2022年の1月まで、イギリスのセントラル・ランカシャー大学に留学しました。大学はイングランド西北部ランカシャー州のプレストン市に

あり、イギリス第三の都市マンチェスターまで電車で40分、ビートルズが生まれ育ったリヴァプールまで1時間で行くことができます。

大学ではスピーキングを中心としたIELTS対策の語学授業に参加していました。授業では積極的に発言する姿勢が求められるため、自身の英語力向上を実感しました。加えて自身の専攻に関する現地授業の受講や、日本語授業にもアシスタントとして参加することで会話力を鍛えることができたと感じています。他にも大学には70以上